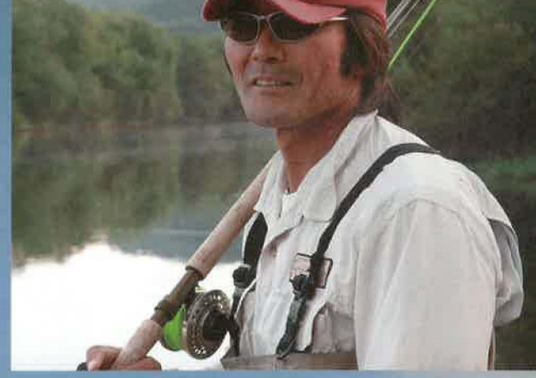
特集 大ものの気配満つ秋 イトウ&ニジマス

天塩ならでは、本流サイズ

夏の高水温が低下し始めた9月中旬。夕暮れ迫るなか、ダブルハンドを引ったくったのは、千葉貴彦さんにとってこの秋いちばんのニジマスかもしれない



千葉貴彦さん、45歳。イトウでもニジマスでもフックはバーブレスしか使わない。今回、初日は下流でイトウ、2日目は中流でニジマスをねらった

夕闇に軋るドラッグ

「キタキタキタ、デカイ！」。夕闇迫る天塩川本流、それまで瀬音しか耳に入らなかった川面に突然千葉貴彦さんのうわずった声とリールの逆転音が響いた。ダブルハンドロッドがバットから曲がり、鋭角的な振幅を繰り返す。そして、「ヤバイヤバイ、フッキングがよくない、バレルバレル、分かるんだ、こういう首の振り方はバレル」と、今度は少々弱気の声……。

この日、朝遅くゆっくりスタートした千葉さんは、この秋初めて本流を釣った。夏に20℃を超えていた水温は19℃を下回ったが、ニジマスにはまだまだ高め。おそらく出ないだろうって感じでTSR14フィート9番のロッドを振り始めた。ラインはスカジットコンパクト600グレイン、ティップは10番タイプ6を4・5m、ナイロン4号2m直結。フライは、それまでインストルーダーだったのを、この場所に来てソフトハックルっぽいウエットの6番に替えていた。そして、朝からこれまでただの一度もニジマスからのシグナルはなく、最後の最後になって突然の幕開けだった。

「それほど大きくないっす。寄って来ちゃった」。何度か逆転音を鳴らした後、リールを巻く手に従うようにニジマスは近づいて来た。そういえば、一回もニジマスらしいジャンプを見せていない。千葉さんがよく言う、「天塩本流の大ニジは、ジャンプ、ジャンプ、ジャンプしながらどんどん下って、そのまま消えていく」とは違う相手、もしかしたらコイかもと邪念が浮かぶ。シンキングのティップが水面から出てきたとき、千葉さんはグイッとロッドにパワーを加えた。と、同時にギャッとリールが悲鳴を上げ、逆転音が鳴り続け、ラインはまた一直線になって下流へ走った。

「ウォー！　やっぱデカイ、デカイよ」。

フローティングボディーが突き刺さる

千葉さんは現在、故郷の名寄に戻りフライフィッシングのネットショップとガイドサービスをしているが、その前は期間労働者としてニュージーランドを始め、日本各地の有名フィールドの近くに移り住んでフライフィッシングをしてきた。道内のフライフィッシャーで、長良川のミッシングや蒲田川のスレッカラシ尺ヤマメを知る希有な存在。人生はフライフィッシングのためにあるという正真正銘のトラウトバムだ。日本ではよい時代を謳歌した50～60代に多いトラウトバムだが、千葉さんは40代半ば、閉塞感漂う現代に生きる若いフライフィッシャーには信じられない生き方かもしれない。よく言えば一途、悪く言えば先のことを考えない人生。

千葉さんが名寄に戻り定住して7年、つくづくこの土地のよさを感じている。山を越せば日本海、オホーツク、どちらの海でもサーモンとアメマスが釣れ、丘を上れば朱鞠内湖、そして何より素晴らしいのが天塩川。今でも心をかき乱すのが本流のニジマスとイトウ。この両者への思いは、スペイキャスティングを身に付けたことでさらに強くなっている。

千葉さんはオーバーヘッドのトーナメンターとして知られるが、最近はスペイキャスティングに夢中。直線で処理するオーバーヘッドと違い、水面にアンカーを入れての曲線運動で生まれるラインの角度変換が無性に楽しいという。飛距離もそうだがバックが取れないところでも、一つ一つの動作のスキルが上がるにつれキャスティングの許容範囲が格段に広がることに奥の深さを感じている。できなかったこと

道具満載の愛車は仕事車でもある。本流のガイドは年に一回あるかないかで、仕事以外でシングルを振ることはなくなった

とができるようになるのが楽しくしようがない。

年に300日釣り場に立つ千葉さん。150日はゲストの釣りを眺め、残りが実際にロッドを持つ自分の釣りだが、1時間でも釣りをすれば1日にしている。1時間でも1日通しでも、自分に与える課題や内容は変わらないからしい。だからか、釣れるからとずっと同じことはしない。たとえばフローティングで天塩のイトウを釣ろうと決め、2年間フローティングミノーを水面でターンし続けたこともある。2年間でイトウのアタックは2回。しかし、水面が水柱で割れた2回の光景は忘れられないほど強烈に残っている。

千葉さんは、教科書どおりに水面に折りたたむペリーポークのようにしてスカジットラインをキャスティングしない。右岸からの場合、右利きから左上手に替えてシングルスペイか、右上手のままスネークロールでキャスティング。このスネークロールが非常にコンパクト。10gを超える重いティップが付いているとは思えないほど、静かに正確にキャスティングする。流しきったらロッドをゆっくり持ち上げ、ティップを水面まで上げたら小さくロッドを跳ね上げ、水面から完全にティップを出したら、これも小さい振り幅でロールさせアンカーを入れる。適切なアンカーによるDループによって、ラインは自然に曲げられたロッドパワーだけで充分に飛んでいくことがわかる。エイ、ヤーではないキャスティング、このあたりにも千葉さんの本領がある

今は、スペイで釣ること。それも、フローティングボディーのシンクティップスタイルで優雅に釣りたい。フルシンクボディーのほうがターン速度が遅くなり有利になることは分かっているが、フローティングボディーが水中に入る瞬間を見たいからだ。そしてそのとおりの光景が……夕闇のなか、深瀬の暗い水面にスカジットコンパクトの鮮やかな緑色がグンッと突き刺さった。

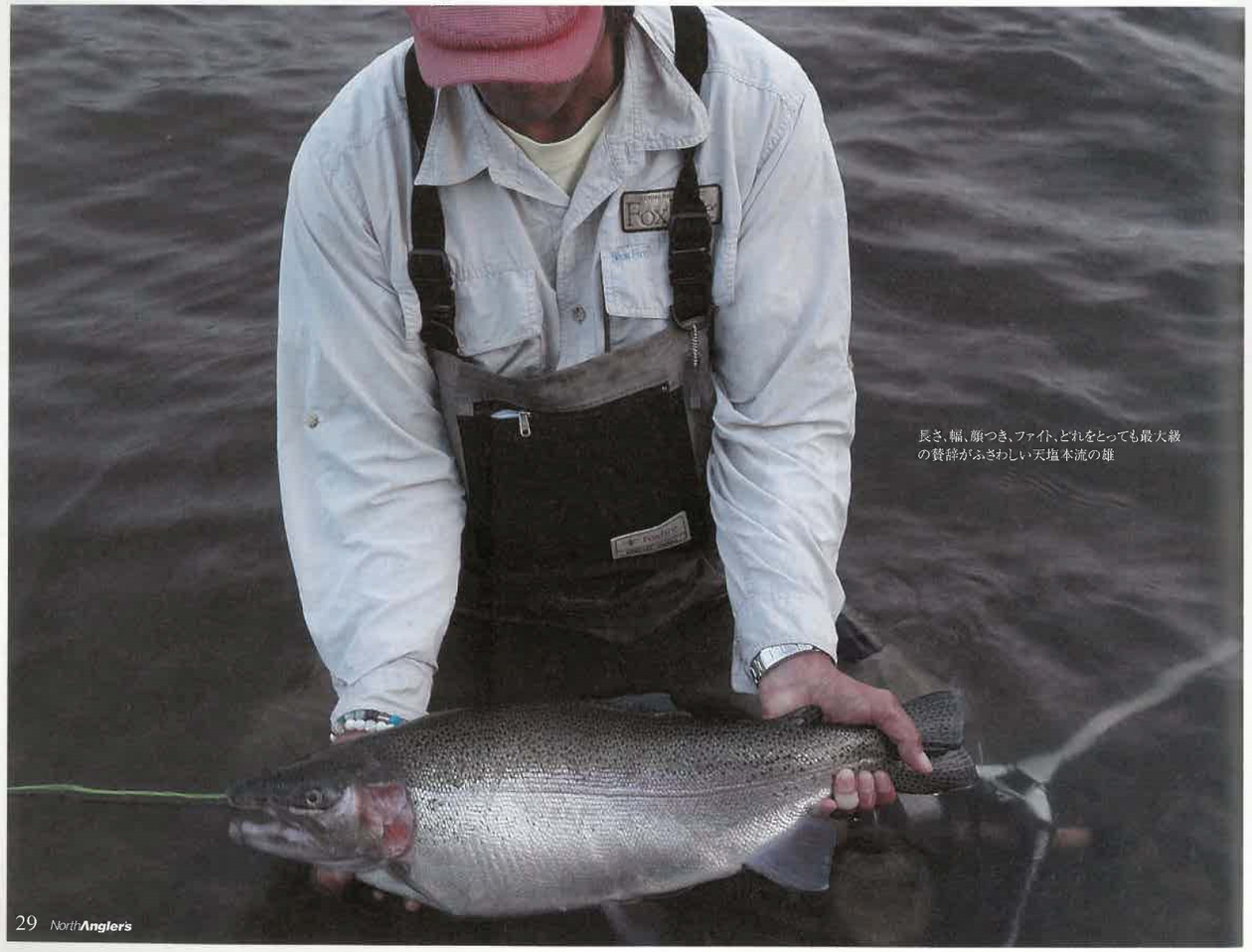
何度かの走りをかわすと、千葉さんはもうバレるとは言わなくなった。ジャンプはせず姿を見ていないものの、ロッドをとおして60アップということに確信を持っていた。闇が迫る水面に横幅を見せた魚体。いつの間にか、下流で釣っていた旭川のフライフィッシャーが来てくれ、柄の長い千葉さんのネットを構えてくれている。そのシニア・スペイキャスターがデカイと言いながら、一発でネットインしてくれた。

シャッターを押す手に力が入るが、初っぱな3、4枚撮ったところで「水温が高いからもう放さないと」と千葉さん。威風堂々と曲がった口からバーブレスフックをさっと外す。千葉さんは深みで魚体を支えながら泳ぎ出すのを確認すると、一番星が瞬き始めた空に両手を突き上げた。

72㎝。千葉さんにして、天塩川本流のニジマスの記録更新サイズだった。

夕暮れの本流、今日初めてのアタリがロッドを叩きまくった（上）
親切な旭川の釣り人がネットインしてくれた（下）

天塩ならでは、本流サイズ



長さ、幅、顔つき、ファイト、どれをとっても最大級の賛辞がふさわしい天塩本流の雄